

中区大井町所在
富士見町遺跡

第2次調査の概要

1983

例 言

- 1 本書は、名古屋市中区大井町一、二丁目に所在する富士見町遺跡第2次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和58年3月1日から同年4月14日まで行った。
- 3 調査は富士見町遺跡発掘調査会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員（平出紀男、野澤則幸、水野裕之）が担当した。
- 4 本遺跡出土の遺物、実測図などは、見晴台考古資料館が保管している。
- 5 本書は調査担当者の三人が作成した。

富士見町遺跡発掘調査の概要

今回の発掘調査は、都市高速道路建設に伴うものである。調査地点は道路下が南北方向に走る地下鉄名城線に沿った前津通りが、東西に走る山王通りと交差する位置にあたる。北側に山王通り沿いの名古屋都市高速道路につながる出口を建設するため、橋脚部分が調査対象地区になった。発掘区は4箇所、北側からⅠ区～Ⅳ区と命名し、調査面積は約600㎡である。調査区ごとに説明する。

Ⅰ区（AR・BOX）

重機で表土除去（約70cmの厚さ）を行ったが、遺物を含む包含層は残存していなく、攪乱土層のみであった。さらに地山（ここでは砂質の熟田層）まで掘り下げ、地山に対して掘り込んだ遺構を数箇所検出し得た。すべて明治時代から昭和時代にかけての遺構であった。その内訳は、井戸状遺構2ヶ所・土坑7ヶ所・ピット（円形状の穴）4ヶ所であった。出土遺物は同様に新しいものであり、明治から昭和にかけての陶磁器、瓦、レンガ等である。以上のように、Ⅰ区は包含層は残存していなく、発掘調査の対象外であり、今回の調査では省略し、平板測量で全体図を作成するに止めた。

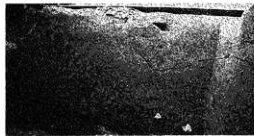
Ⅱ区（PR7）

Ⅱ区は現地表下約40cm位で包含層と思われる暗褐色砂シルト層を検出し、以下からは人力による掘削を開始した。地山の砂層までは現地表より約3mの深さで、当初の予想とはかなり違っていた。堆積している包含層は土質及び色調から大きく3層に区分し得、それぞれ出土遺物を層ごとに袋をかえてとりあげた。上層の暗褐色砂シルト層からは、弥生土器・鎌倉時代頃の山茶碗・江戸及び明治時代（？まだ確定していない）の陶磁器片が、やや小破片ではあるが出土している。従って、同層は包含層ではなく、比較的新しい時期に形成されたものと考えられる。同層以下は、一部溝状のような落ち込みが検出し得、その埋土は灰青褐色砂シルト層であった。灰青褐色砂シルト層からは、弥生土器（高杯・甕・器台など）、奈良時代から平安時代にかけての須恵器（杯身・蓋など）、灰釉陶器、緑釉陶器と市内の遺跡としては比較的珍しい遺物が出土している。また、平安時代末期から鎌倉時代にかけての壺・甕・鉢・山茶碗及び室町時代頃の瀬戸窯産の四耳壺・山茶碗が、破片ではあるが群を成して出土しているのが検出された。地山の砂層上に径30～40cm大の石（河原石）が集積して出土しているが、恐らく付近から流れて集まったものと考えられる。この部分でも同様に多量の遺物が出土している。さらにその下層の黒褐色砂シルト層からも遺物はそう多く出土してはいないが、弥生～中世にかけての遺物が見られる。さらにその部位の地山直上に古墳時代の弥生土器・土師器・須恵器などが同様に陶器群を形成しているのが検出されている。

遺物は今回の調査ではⅡ区出土のが最も多く、内容も弥生～中世期の土器・陶磁器などが過半数を占める。特殊なものとしては、弥生時代頃の石鏃・銅鏃・石斧・中世期の中国陶磁などがあげられる。



Ⅱ区掘削風景

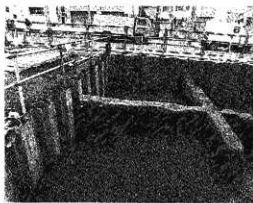


Ⅱ区南北アゼ断面（南半部）

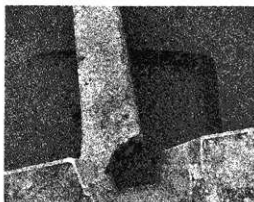
Ⅲ区 (PR6)

Ⅲ区は現地地表下約20cmで包含層(暗褐色上層)を検出し、以下からは人力による掘削を開始した。およそ10cmから20cm程度の掘削を徐々に行い、遺物の出土状況(垂直、平面分布)を把握できるよう務めた。暗褐色土層(層厚さ40~70cm)上位では、弥生土器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗片が混在した状況で検出された。中位でもほぼ同様であったが、遺物量が相対的に少なめであった。下位では比較的保存状態の良い弥生土器・土師器が数個体認められた。より下位にある黒褐色土層(層厚さ30~50cm)の直上レベルでは、他の土層に比べ、弥生土器・土師器が最もまとまって検出されている。これは、当時の生活面としてとらえることができそうである。事実、Ⅲ区のグリッド北東部からかグリッド北西部にかけて、周溝を有する弥生時代の住居址の一部と考えてさしつかえのない竪穴遺構が、黒褐色土層を掘り込んだ状態で検出された。以下の黒褐色土層内では、ごくわずかの弥生土器・縄文土器片が含まれていたにすぎず、ベースの青灰色粘土層へと続く。

遺物の総量はコンテナケース14箱である。その内訳の大半は弥生土器であるが、他に土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗・石器などがある。



Ⅲ区南北アセ断面(北半部)



Ⅲ区検出竪穴状遺構(北側から)

Ⅳ区 (PR5)

Ⅳ区の遺物包含層は、西側の地下鉄工事による埋土、南東隅の近世以降に埋設した土管埋め込み部分を除き、面積の70%以上は後世の攪乱をうけずに良好な状態で残っていた。層位は上部から深さ90cmまでは暗褐色を呈する。弥生後半期から古墳時代以降中世までさがる遺物（主に小さな破片であるが、壺・甕・杯・瓦などが発見された）を含む土層が堆積し、その下層は約30cmの厚みで黒褐色土層となっている。この層の遺物は、弥生時代後半期の土器片を主体とし、奈良、平安時代以降の時期の遺物はほとんどないと思われる。また、この黒褐色土層を掘り込んでつくられたとみられる1メートル四方の土坑が検出され、その埋土の深さは、さらに下層の粘土層、黒色土層をも掘り込んで約60cmの深さの穴であった。

このなかからは、平安時代の須恵器（杯、長頸瓶）が多くの木片、種子（桃か梅の種属と思われる）を伴って発見されている。貯蔵用の穴であったかもしれない。

黒褐色土層の下は灰褐色粘土層が堆積しており、この粘土層の上には、柱または杭を立てたと思われる痕跡（ピット）がいくつか検出されたが、建物に伴うものなのかという性格は不明である。ただし、この粘土層面がある時期に生活面になっていたことは考えられる。粘土層以下の層位は植物を多く含む沼地性堆積物が厚くたまっているようであり、土器などの人工遺物は全く発見されず、粘土層以下は調査の対象外と判断した。

結局、Ⅳ区から出土した遺物の総量はコンテナケース9箱分となったが、他の調査区に比べると遺物量は少なかった。

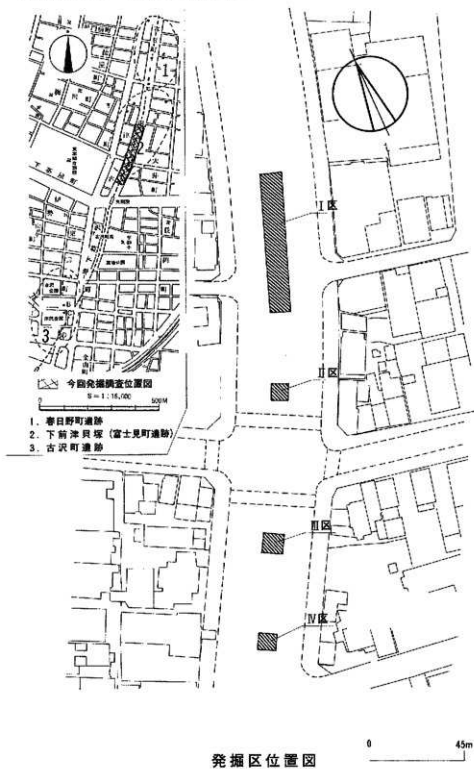


Ⅳ区東西アゼ断面

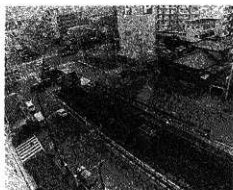


Ⅳ区検出土坑遺構

遺跡位置・発掘区配置図



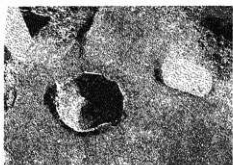
写真図版



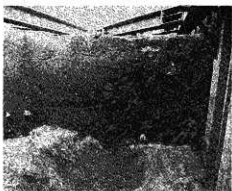
発掘区全景



I区検出土坑遺構



I区検出井戸遺構



II区東西アセ断面(東半部)



II区検出陶器群



II区検出陶器群



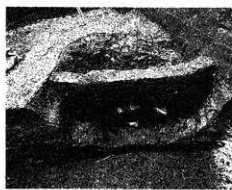
II区検出陶器群



III区東西アゼ断面



IV区検出土坑遺構



IV区検出土坑遺構埋土断面

富士見町遺跡 第2次発掘調査の概要
編集・発行 富士見町遺跡発掘調査会
名古屋市南区見晴町47番地
印刷 澤多印刷有限会社